

京都精華大学 男女共学

大学案内

1987

美術学部——造形学科・デザイン学科

短期大学部英語英文科

■目次

<知>の変貌と創出／学長 笠原芳光●1

京都精華大学の沿革●2

学科課程 英語英文科

広い教養の習得を理念として●3

VOICE①●4

小さな国際交流／大学の歌と校章●4

「自由自治」の四文字●5

新しい発見をしたい人へ●6

海外研修●10

授業紹介●12

VOICE②●14

自由な雰囲気の中かで／京都散歩に凝って

感動のパノラマ／男女共学ということ

教員組織●16

学科課程 美術学部

専門領域での広い視野●17

造形学科 洋画専攻●18

日本画専攻●19

立体造形専攻●20

美術学部の新専攻分野

用と美の価値を追求●21

造形学科：版画専攻／ニューメディアを美術する●22

造形学科：陶芸専攻／現代芸術としての陶芸の在り方を●22

デザイン学科：アーバンリビングデザイン専攻／都市は大きな住まい、住まいは小さな都市●23

“開かれた大学”を目指して●24

デザイン学科 ビジュアルデザイン専攻●25

染織専攻●27

マンガ専攻●28

学外実習制度●29

VOICE③●30

ブラジルが示唆するもの／生き方を決定づける出会い

裸婦クロッキーを通して／自分自身の確信を／校歌を創る自由

教員組織●32

図書館案内●33

アッセンブリーアワー●34

クラブ・行事●35

学外教育施設●36

厚生●37

卒業後の進路●39

所在地図●41



<知>の変貌と創出

学長 笠原芳光

最近の学生はあまり本を読まないといわれています。読まない、書かない、考えないのが学生だという人さえあるくらいです。

しかし、いまの学生の多くは読書量は少くとも、絵を描いたり、楽器を演奏したり、スポーツを楽しんだり、機械を動かしたりすることができます。思索の結果を論理的に言語化するよりも、感覚的にとらえ、イメージとして表現する、いわゆるセンスに富んでいる若者が少なくありません。

これらの事実は知性や思想というもののありかたが変化しつつあることをあらわしています。いわゆる<知の変貌>という事態が起っていることの一つの現象だと思います。知的空間である大学も、これからは、そのような傾向と無縁ではありえないでしょう。

いままで知性や思想といえば、深遠なもの、重厚なものであるべきだと思われていました。しかし最近はずっと日常的なもの、軽やかなものの知的価値が発見されるようになりました。それも思想が軽くなったというよりも、これまで軽いと思われていたものが思想化されつつあるというべきでしょう。

しかし、ただ軽ければよいというわけではありません。軽さにもいろいろな種類があります。今世紀前半のフランスの文学者ポール・ヴァレリーは、その著『言わざりしこと』のなかで、「羽毛のようにではなく、鳥のように軽くなければならない」といっています。

羽毛の軽さと鳥の軽さをくらべれば、重量としては前者のほうが、はるかに軽いことはいまでもありません。しかし羽毛の軽さは風に漂い、流されてゆく、いわば物として、客体としての軽さでありま

す。それに対して鳥の軽さは風を切って、自由に飛ぶ、生命として、主体としての軽さです。それはまた死んでいる軽さと、生きている軽さといってもよいでしょう。

従来、重いことはよく、軽いことはよくないというように、そこには価値的な差異がありました。それは重厚や重視という言葉と、軽薄や軽蔑という言葉とを比較してみてもわかることです。だが大切なのは重さを含み、重さを超えた軽さではないでしょうか。

以前、神戸の造船所で進水式を見たことがあります。式の始まる前、一万三千トンの船体がドックに横たわっている間は、重い鉄の塊という印象がありました。だがファンファーレが鳴り響くなかで、綱が切断され、くす玉が割れたとたん、巨大な船はじつに軽やかに滑りだし、みるみるうちに水上に浮かんだのです。

その時、一万三千トンの重量は消えてしまったのでしょうか。そうではありません。船は重いままで軽くなったのです。重さにもかかわらず軽くなったのです。これは思想や文化、そして人間の問題にも通ずる事柄ではないでしょうか。

知の変貌にともなう、新しい知というものは、ともすれば既成のアカデミズムからは、流行を追い、軽薄なものと思われがちであります。現代の学生の知的傾向が、もしもそのようなものであるとすれば、それはたちまち過ぎゆくもの、消えゆくものでしかないでしょう。

古いアカデミズムを超えた、新しい知性の創出こそ、今日の大学の課題であります。

沿革

- 1968(昭26) 京都精華短期大学(共学)を開学
- 英語英文科
 - 英米文学コース
 - 秘書コース
 - 貿易英語コース
 - ガイドコース
 - 美術科
 - 絵画コース
 - デザインコース
- 「アッセンブリー・アワー」始まる
「The Kyoto Seika English Papers」
発刊
- 1969(昭45) 美術科に染織コース増設
「木野通信」刊行始まる
- 1970(昭46) 「木野評論」(年1回刊)発刊
- 1972(昭47) 英語英文科に国際文化コース増設
- 1973(昭48) 美術科に立体造形コース、デザインコースにマンガクラス増設
第2外国語に朝鮮語開設
- 1975(昭50) 伊谷記念朽木学舎オープン
「The Kyoto English Papers」を
「Kyoto Review」に改称
- 1979(昭54) 京都精華大学美術学部開設
- 美術学部
 - 造形学科
 - 洋画専攻
 - 日本画専攻
 - 立体造形専攻
 - デザイン学科
 - デザイン専攻
 - 染織専攻
 - マンガ専攻
- 京都精華短期大学英語英文科は京都
精華大学短期大学部英語英文科に改
称
- 1982(昭57) 京都精華短期大学美術科を廃止
- 1985(昭60) 丹後学舎オープン
- 1986(昭61) 美術学部造形学科に版画専攻と陶芸専
攻、同デザイン学科にアーバンリビ
ングデザイン専攻の増設を決定





タイ・ツアー寸景



恒例「五月祭」

大学の歌と校章

この大学には、まだ大学の歌も校章もありません。いわゆる「大学側」が、それらを制定して学生に強制することを恥じ、学生たちの中から、自由に生み出されることを待っていたからであります。想えば日本の大学の歌として、この百年近く、うたいがれてきた歌の多くは、ときの学生たちのつくった寮歌であり、部歌でありました。私はわが大学に、多くの詩と音楽と構図の才に富む学生のあることを知っております。その天才の爆発を、私はいつまで待っておればいいのでしょうか。

もし毎年、学生たちが自分たちの大学歌をつくり、そして自分たちの印を胸につけつつ百年たったら、百の大学歌と百の校章とができます。こうしてある日、その一つが選ばれて、旗をなびかせ、大合唱をつくり出す、というわが大学の構図を画くことは、愚かなことでしょうか。

岡本清一
教授
英国史担当



小さな国際交流

本年4月から5月にかけて、日本の学生、社会人約20人が、タイ北部コンサン県のナムボン村を訪れた。今回の企画は、本学で国際経済学を講ずるタイ出身のクントン・インタラタイ教授によるもので、医療センター建設のためのワークキャンプを通じて現地の人々と交流をもち、物質的な経済協力をこえた心のふれあいをもとうとするものであった。村の農家にホームステイをし、夕方には歌や民族舞踊を披露し合うなど、お互いの理解と親善を深めた一週間であった。

「自由自治」の四文字

「主流化」という言葉がある。英語では、メインストリーディングと言われ、「普通化」・「常態化」等の言葉と共に、障害児の統合教育場面で使用されている。言わゆる「普通」と呼ばれる人々の生活様式が、世の中の主流と成っていて、人々はこれを「一般常識社会」と呼んでいる訳であるが、この主流から外れていると評価された人々は、各人の理念や主流と呼ばれるものの詳細を検討・判断することなく、我れ先きにと急いでこれに混ざってしまおうとする傾向にある。また、そうすることにより、一種の安心感を得たような気になっており、主流に付随することが、望ましい生活形成につながると錯覚してしまっている。

世の中の、何が主流で何が支流か・何が常識で何が非常識か・何が普通で何が異常か・これらを吟味し決断を下す権限は、各人の才量にあることを再確認する必要性に迫られている。

カントは、「人間とは、教育をうけなければならない唯一の被造物である」と記述している。大学における教育とは、教授すること、させることを通して、各々の人間が各々の文化を持つことであると解釈した。

京都精華大学における「自由自治」の四文字は、我々に自由の爽快さと自治の困難さを通して、何かを与えてくれるものと期待している。我々、それは京都精華大学に入学してきた前途洋々たる若者たち、そして、今まさに「自由自治」の吟味に取り組んでいる私に。



栗巢 満・講師 体育実技、保健理論担当。天理大学体育学部、筑波大学大学院体育研究科を経て、今春就任

美術学部 新専攻分野 昭和62年度からスタート

● 版画・陶芸・アーバンリビング デザイン〈都市と住宅のデザイン〉

用と美の価値を追求

京都は伝統の美と前衛の美が、いきいきと調和している、この国で最もすぐれた芸術都市であります。

われわれの京都精華大学美術学部は、その京都を土壌にして美術とデザインをさらに発展させるため、1979年に、それまでの短期大学美術科を母胎として創設されました。

ここには従来、洋画、日本画、立体造形、デザイン、染織、マンガという6つの分野があり、美術界、教育界さらに産業界においても、すでに大きな評価を得てきました。

われわれは、その成果を踏まえて1987年度から新たに、版画、陶芸、アーバンリビング デザインという3つの分野を創設することにしました。

版画はここ数年来、国内的にも国際的にも関心がきわめて高くなっています。これからさらに多彩な展開が期待される領域であります。

陶芸はとくに京都においては、美術はもとより産業としても重要な分野です。用と美の両様の価値を追求していきたいと願っております。

アーバンリビング デザインは都市の住まいに関するデザインという意味です。この分野は人間の心の触れあいの環境づくりを「都市は大きな住まい、住まいは小さな都市」というスローガンのもとに、感性ゆたかな建築デザインを探究する画期的な試みです。

いまわれわれはこれら3つの分野に、最高の教授陣を迎えようとしています。この新分野はわれわれの大学の新しい、大きな特色となると確信しております。

芸術創造の意欲に燃える諸君が、ふるって参加されることを願ってやみません。

